# 英語における文法的逸脱と変則的表現の研究

キーワード[英文法，変則的表現、言語の創造性]

教授　鈴木 亨

次のような英語は、一見すると一般的な英語の文法規則を逸脱した変則的表現に思えますが、それぞれ適切な文脈があれば、多くの英語話者にはさほど無理なく理解できるものです。

(1) He kissed these questions from her lips.
＊動詞kissの本来の目的語らしきher lipsが前置詞fromを伴って文末に生じ、these questionsという抽象物が目的語（行為対象）になっているように見えますが、どういう出来事を表しているのでしょうか？

(2) I wonder how many people actually think music when they are listening to it.
＊動詞thinkは自動詞なので、目的語のmusicの前にはofかaboutのような前置詞が必要なのではないでしょうか？

このような表現が英語として受容される背景には、それを可能にする文法のしくみと適切な使用場面の理解があります。

共編書『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』（2019年刊）では、文法規則の一般化からこぼれ落ちてしまうような「慣用」や「変則」に焦点を当て、理論的に分析することにより、言語の創造的側面や多様性を志向する姿を浮き彫りにしています。

研究テーマ：

英語において文法的な逸脱を示す変則的表現が生じるしくみとその使用場面の分析を通じて、言語の創造性の一端を解明することが研究テーマです。

私たちはことばを使い、自分の経験や思いを自由に表現しているつもりかもしれませんが、ふだんあまり意識しないところで、言語表現には文法という枠がはめられています。言語現象を丁寧に観察すると、私たちの表現欲求と文法の制約がせめぎあうような面白い表現に出会うことがあります。

例えば、Apple社の宣伝文句で有名になった“Think different.”という表現は、いわく言いがたい違和感のある表現です。動詞を修飾するのであれば、形容詞（different）ではなく、正しくは副詞（differently）を使うべきではないでしょうか？

一見すると逸脱的な変則的表現にも、それなりの成立背景があり、使うのにふさわしい場面があります。言語の創造性は決して無秩序な変化の反映ではないというのが、言語研究の教える知見です。

アピールポイント：

英語表現に関する構文論や意味論を中心に、日英語の対照研究や翻訳論、文体論、英語教育なども扱います。

分　野：英語学
専　門：英語構文論、語彙意味論、語法文法論

E-mail：torus [at] human.kj.yamagata-u.ac.jp
Tel：　023-628-4795